

## 討論の結論に至るまでの過程

—日中談話の対照研究—

御園生陽子 程田彩 アネークポンパン・ワッチャリン 柳田しのぶ

### 要旨

本研究では、日中両言語で行われた、仕事あるいは恋人の条件の順位を決める討論の談話資料を対象として、その結論に至るまでの過程を分析した。その結果、両言語でともに「条件提示⇒条件すり合わせ⇒順位決定」という過程が見られた。しかし、日本語では討論形式の話段や脱線話段による「割り込み」現象が多く観察され、中国語よりも多い話段数で討論が構成されていた。また、話題が討論から脱線した場合でも、日本語では小話段が展開されることが多いのに対し、中国語ではほとんど脱線話段が持続しない傾向があった。以上から、本資料の日本語討論では、会話参加者が討論の目的を意識しつつも、協調的な雰囲気を保つために、「割り込み」現象や脱線話段を許容していることが考えられる。一方の中国語討論では日本語に比べ、あくまでも討論の目的を優先する傾向が見られた。ただし、今回の結果は本調査の資料によるものであり、討論全般に援用するには至らなかった。

**キーワード：**討論、結論に至るまでの過程、日中対照、討論話段・脱線話段

### 1. 研究の動機と目的

会議や学生のゼミナール等で日本語母語話者と非母語話者での討論が行われた場合、話し合いの仕方に違いがあると指摘されることがある。外国人留学生などから「日本の話し合いは長い」などと言われることから、討論における話題の移り変わりや話の運び方が言語文化圏によって異なることが予測される。

討論とは、会話参加者間に「結論に向けて意見をまとめていく」意識が

ある談話だと考えられるが、結論に至るまでにはどのように話題が移り変わっていくのだろうか。これらの言語文化圏による違いを見るためには、異なる言語の母語での討論の特徴を明らかにすることが有効であると考えられる。

しかし、これまでの話題転換に着目した会話分析では、日本語母語話者同士、あるいは接触場面での雑談が中心的に扱われてきた。この種の研究では、対象資料の中でどのように話題転換が行われ、どのような表現が使用されているかということが主眼であった(木暮 2002、河内 2003 など)。しかし、討論は結論に向かって意見をまとめていく意識が働いているものであり、雑談とは異なっている。陳(2002)では、母語による討論の台日対照研究を行っているが、管見の限り討論を対象とした研究は少なく、まだ十分とは言えないようである。

本研究では日本語と中国語の母語での討論を取り上げ、結論に至るまでにどのような過程を経ているかを記述することを目的とする。分析に際しては設定されたテーマでの友人同士の討論を対象とし、討論内の話題の移り変わりに注目する。

## 2. 先行研究

ここでは、本研究の分析観点に関わる先行研究を検討し、本稿の立場を述べる。

佐久間(1987)は、文章の構成単位に関して「提題表現の統括<sup>1)</sup>」という基準を設け、内容上のまとまりとして他と相対的に区分される「文段」という成分で文章を捉えることを提案した。その後、佐久間(1997、2003)では書き言葉における「文段」という単位を話し言葉に応用し、意味内容上の相対的なまとまりとしての「話題<sup>2)</sup>」及び談話の成分としての「発話」と「話段」という2種の区別を立てることを提唱した。

次に河内(2003)を挙げる。河内(2003)は、「最小の話題は一對の『提題表現』と『叙述表現』からなる」という佐久間(2002:167)の説に従い、「最小の話題」の連鎖がまとまりをなし、そのまとまりが「話段」とであると定義した。また、雑談を内容で区切る話段区分調査を日本語母語話者に行い、隣接する「話段」との関連性を基準に「大話段」「話段」「小話段」に分けた。そして、雑談における話題展開について、それぞれの話段における特徴を分析した。

また、山本(2003)は、話題転換のタイプに関して、前の発話を構成する名詞句や節などの言語表現と「繋がり」を持つかどうかで、「連続タイ

プ」と「非連続タイプ」とに分類し、話題転換の型や転換時の言語表現を分析した。「連続タイプ」には、先行表現をそのまま受け継いだものや、先行表現から想起されたもので後続の発話が構成される場合が含まれる。「非連続タイプ」には、とぎれていた話題、もしくは、一度終結している話題が再開されたり、全く新しい話題が導入されたりするものが含まれる。

本稿では以上の先行研究を踏まえ、日中両言語の討論における結論に至る過程を分析するために、佐久間(2003)と河内(2003)の話段の概念を参考にし、談話の区分を行った。この区分については後に詳しく触れる。また、本稿の目的が討論の結論に至る過程を明らかにすることである以上、隣接する話段間の繋がりを見る必要がある。そこで、山本(2003)の連続タイプと非連続タイプの分類を用い、談話内で話題がどのように移行しているかを具体的に分析する。

### 3. 研究方法

本研究では、実際の会話データを分析対象とし、日中討論の結論に至る過程を明らかにするため、「大話段・小話段」、「討論話段・脱線話段」、「連続タイプ・非連続タイプ」という3つの観点から分析を行う。分析観点の詳細については、第4章で述べる。

#### 3.1 データ収集方法

本研究で用いた会話データは、会話参加者に「仕事に求める条件ベスト5を決める」もしくは「恋人に求める条件ベスト5を決める」という2つのテーマから1つを選択し、行ってもらった討論である。より活発な討論を収集するため、親しい友人同士の会話参加者3名を1グループとした。なお、性別と年齢に関しては制限を設けないこととした。会話収録の際、発話者をより正確に判断するために、ICレコーダーでの録音と同時に、ビデオカメラによる録画も行った。

収録データは、日本語母語話者6グループ(以下 J1-J6)と中国語母語話者6グループ(以下 C1-C6)の計12グループのものである。討論の前に、会話参加者に討論テーマを選択させ、5分程度条件を考える時間を個々に与えた後、20分間でグループの条件ベスト5を決めるよう指示し、会話収録を行った<sup>3)</sup>。

### 3.2 討論の文字化方法

収録した討論は、調査者が会話収録の部屋を退室したところから再び入室するまでの20分間を文字化した<sup>4)</sup>。文字化資料の表記方法は会話資料書記法(2002)<sup>5)</sup>を参考にした。詳しい書記法については注<sup>6)</sup>を参照のこと。

表記については、日本語会話は漢字仮名混じり文で、中国語会話は中国語簡体字で行った。また、座る位置により、左側の話者を「A」、中央を「B」、右側を「C」で示した。人名や会社名等は個人情報保護のため、イニシャルで表記した。

## 4. 分析観点

本研究においては、以下の観点から分析を行っていく。

### 4.1 大話段・小話段

河内(2003:42)は以下のように話題と話段の概念を述べている。

「話段」の定義は「内容のまとまり」であるとする。「最小の話題が一对の『提題表現』と『叙述表現』からなる」という佐久間(2002:167)の説に従い、提題表現で取り上げられるものが「最小の表現」であり、「最小の話題」の連鎖が話題のまとまりを成して、そのまとまりが「話段」であるとする。

本稿での話題と話段の概念についても、佐久間(2002:167)と河内(2003:42)を踏襲するものとする。話段区分調査の結果から、「大話段」と「小話段」という2段階の単位を設けることにした<sup>7)</sup>。本研究では、討論の結論に至る過程を明らかにすることが目的となる。そのためには、「大話段」の分析により討論全体の流れを観察し、さらに、「小話段」でそれぞれの「大話段」内での話題の移行を見ると、2つの異なるレベルから分析することが必要であるとする。

話段区分調査方法<sup>8)</sup>については、河内(2003)の手法を参考にした。はじめに、会話参加者とは異なる話段区分調査者(日本語母語話者3名と中国語母語話者3名<sup>9)</sup>)にビデオを視聴しながら、文字化資料を内容のまとまりで区切り、それぞれにタイトルを付けることを依頼した。そして、これらのタイトルから執筆者の話し合いにより最終的なラベル付け(「条件提示」や「順位決定」等)を行った。以下の表1はその具体例である。

表 1：大話段と小話段の例 (J 5)

大話段	小話段
16：条件提示 (討非 <sup>10)</sup> )	16-1： スキルアップ
	16-2： 人間関係
	16-3： 休暇

16の「条件提示」という「大話段」は、「16-1：スキルアップ」、「16-2：人間関係」、「16-3：休暇」という「小話段」で構成されている。

調査結果と話段の内容に基づき、区分した人数が2人以上のまとまりを「話段」と認定した。話段区分調査者間で区分が一致しない場合は、執筆者の見解が一致するまで議論を行った<sup>11)</sup>。そして、隣接する「話段」に関連性があり、1つにまとめられるものを「大話段」とし、その下位区分を「小話段」とした。しかし、話段の箇所によっては、区分の大小に調査者間で個人差が生じる場合もあった。その際には、話段区分調査の結果を参考に執筆者で議論し、「大話段」と「小話段」を認定した。

#### 4.2 討論話段・脱線話段

討論では、結論を決めるという目的を達成するための内容を持つ話段と、そうではない話段が考えられる。そこで、討論の特徴を明らかにするために、大話段を「討論話段」と「脱線話段」に区分した。「討論話段」とは、討論テーマの各条件についての意見のすり合わせや順位付けに関すること、条件確認や条件に関する説明・経験談など、討論に深く関連する内容を持つ話段である。一方「脱線話段」とは、討論話段の話題から想起された条件に関する説明や経験談が発展し、条件の話題から大きく逸脱したものや、調査者や収録機材を意識した発話など、討論の内容から脱線した話段である。

#### 4.3 連続タイプ・非連続タイプ

討論の結論に至る過程を示すためには、隣接する話段の繋がり方に日中両言語でどのような特徴があるかを明らかにする必要がある。そのために山本(2003)で提唱された「連続タイプ」と「非連続タイプ」という観点を取り入れた。前述の通り、「連続タイプ」とは、直前の話段の内容から派生したり、連想されたりした話題が続くことである。また、「非連続タイプ」とは、新規に話題が導入されたり、とぎれていた話題や一度終結した話題が再開されたりすることである。次節で具体的な実例を挙げる。

#### 4.4 討論話段と脱線話段の連続タイプ、非連続タイプの事例

本節では以上3つの分析観点を踏まえ、①「討論話段連続タイプ」（討連）、②「討論話段非連続タイプ」（討非）、③「脱線話段連続タイプ」（脱連）、④「脱線話段非連続タイプ」（脱非）という4つのタイプを設定した。以下に具体例を挙げる。

はじめに、①「討論話段連続タイプ」について、日本語の例で説明を行う。

例1：①討論話段連続タイプ(J5)

発話番号	話者	大話段	小話段	発話
296	A	討非・ 2位以下の 条件提示 (255-298)	サービス 残業 (290-298)	うんーきれいなねーちゃんと一緒だった
297	C			らねいいんだもんね
298	B			いや時と場合に//よる /それもあるけどー
→299	A	討連・ 順位決定 (299-312)	決定方法の 統一 (299-306)	{笑い}なんでもいいや,じゃ,や,だからあ たしは一なんだっけなんだっけ人間関係 よりも休暇のほうが重要
300	B			え,今その逃げる問題だっけ//{笑い}ちが くない?

「討論話段連続タイプ」とは、討論話段が直前の話段からの派生や連想によって展開するタイプである。例1では、298Bまでで仕事に求める2位以下の条件の提示をしているが、299Aの発話から、順位決定の話段に移行している。

次に、②「討論話段非連続タイプ」について、中国語の例で説明する。

例2：②討論話段非連続タイプ(C3)

発話番号	話者	大話段	小話段	発話(日本語訳)
1	B	脱非・機材意識(1-3)		镜头正对着我(カメラ,こっち向いてる)
2	A			{笑}
3	A			对啊,所以说这个重点给你{笑}(そうだね, 一番良い席だね)
→4	B	討非・ Bの条件提示 (4-25)	親孝行 (4-13)	我觉得这三个要求你俩看吧(私はこの三つ かなあ,ちょっと見て)

「討論話段非連続タイプ」とは、討論話段が直前の話段との関連性を持たずに展開するタイプである。例2では、1Bから3Aまでは討論とは関係のない録画カメラについて話していたが、4Bからは本論に戻り、カメ

ラとは関連のない条件提示を始めている。

次に、③「脱線話段連続タイプ」について、日本語の例で説明する。

例 3 : ③脱線話段連続タイプ(J6)

発話番号	話者	大話段	小話段	発話
235	C	討非・ 5位条件提示 (216-237)	勤務時間 (232-237)	ちやうんそれは仕事の一仕事をする時間, その一拘束される時間って必ずあるやろ? 8 時間拘束とかでも今なんか話を聞いたらば一8 時間拘束なんてあつてないようなものやでも一そんな中でも一敢えて, 欲しい, //8 時間
236	A			/5 時には帰りたい//い
237	B			/そう 5 時には帰りたい公務員的なこう一仕事拘束時間
→238	A	脱連・定時の F 先生 (238-253)		F 先生ね一むかし一G に勤めてたらしいんだけど定時の F って呼ばれてたらしいよ// {笑い}
239	B			/ {笑い} まじで

「脱線話段連続タイプ」とは、脱線話段に移行する際、「討論話段連続タイプ」と同様に、前の話段と繋がりがあるタイプである。例 3 では、「勤務時間」という小話段において、237B の「仕事拘束時間」という言葉から想起された「定時の F 先生」という話題が発展し、その話段が 238A から発展している。

最後に、④「脱線話段非連続タイプ」について、中国語の例で説明する。

例 4 : ④脱線話段非連続タイプ(C3)

発話番号	話者	大話段	小話段	発話(日本語訳)
193	C	討非・ 順位決定 (93-194)	共通言語 (184-194)	不是学历不重要, 比学历重要的还是共同语言嘛//你学历的目的是共同语言嘛//(学歴はどうでもいい訳ではない。学歴より共通言語じゃない//あえて言うなら学歴も背景の一つ)
194	A			/那不一定/那不一定(/どうかな/そうだと は限らない)
→195	B	脱非・機材意識 (195-202)		靠近一点, 靠近一点(こっち向いて, こっち向いて)
196	A			{笑}

「脱線話段非連続タイプ」とは、「討論話段非連続タイプ」と同様に、脱線話段が直前の話段との関連性を持たずに展開するタイプである。例4では、194Aまでは討論に関することを話しているが、195BからはICレコーダーについて話し始めている。このICレコーダーは、前の話段との関係が一切見られないものである。

以上の観点を踏まえて、討論における結論に至る過程を分析した。

## 5. 日本語・中国語の討論資料の分析

ここでは、調査で得られた日中両言語の会話資料における討論の結論に至るまでの過程を分析し、考察を述べる。

本調査資料の討論は、日中両言語ともに討論話段と脱線話段で構成されていた。しかし、日本語の大話段数が1グループあたり平均23話段であったのに対し、中国語は15話段と大話段数に違いが見られた。日本語・中国語の討論話段と脱線話段の集計表は表2、表3に挙げる。表2、表3より、討論話段の平均は日本語で61%、中国語で60%と全大話段数の半分以上を占めた<sup>12)</sup>。対して、脱線話段の平均は日本語で39%、中国語で40%と討論話段より少なかった。これは、「仕事もしくは恋人に求める条件ベスト5を決める」という目的を達成しようとし、討論話段を優先した結果であると考えられる。これは、話題を自由に展開できる雑談とは違った、討論の特徴の1つと言えるだろう。

表2：討論話段と脱線話段の大話段数

(日本語)

	討論話段	脱線話段	合計
J 1	18(60%)	12(40%)	30
J 2	20(67%)	10(33%)	30
J 3	14(64%)	8(36%)	22
J 4	10(77%)	3(23%)	13
J 5	15(65%)	8(35%)	23
J 6	8(38%)	13(62%)	21
平均	14(61%)	9(39%)	23
標準偏差	4.6	3.6	6.4

表3：討論話段と脱線話段の大話段数

(中国語)

	討論話段	脱線話段	合計
C1	10(56%)	8(44%)	18
C2	13(68%)	6(32%)	19
C3	11(55%)	9(45%)	20
C4	6(75%)	2(25%)	8
C5	6(75%)	2(25%)	8
C6	9(60%)	6(40%)	15
平均	9(60%)	6(40%)	15
標準偏差	2.8	2.9	5.4

\*注1 ( )内のパーセンテージは全大話段数からみた割合である。

\*注2 全データ正規分布内であった。(平均値±2SD)

次節からは、討論話段、脱線話段、また討論全体を通じた日中両言語

の特徴について、詳しく述べていく。

### 5.1 討論話段の特徴

まず、討論話段では大話段に特徴が見られた。日本語、中国語ともに討論の結論である条件の順位決定の方法が大きく分けて2通りあった。1つは、会話参加者それぞれが、はじめに自分が挙げた条件ベスト5について話し、全員の条件が出揃ったところで、改めて条件の確認を行い、互いの意見をすり合わせながら3人の結論を決めるグループであった(J2・J3・J4・C1・C2・C3・C5・C6)。もう1つは、それぞれの順位ごとに会話参加者が自分の条件を提示し合い、同時に意見のすり合わせを行いながら、1位、2位と1つずつ決めていくグループであった(J1・J5・J6・C4)。どちらの方法も、日本語、中国語で観察されたが、中国語では前者の方法に偏る傾向があった。勿論この2つのタイプが同一討論内に混在する箇所もあったが、概ね上で述べたように大別された。

一見、2つのタイプは全く別の構造を持っているように思えるが、結論である順位決定までの過程に注目すると、共通して「条件提示」⇒「条件すり合わせ」⇒「順位決定」という手順である。よって本調査の分析では、日中両言語で結論までの順位決定の過程に大きな差異はなく、上記のような基本的な過程が見られた。

また、両言語共に「討論形式」について言及する話段が存在するのも、1つの特徴と言える。「討論形式」の話段とは、会話参加者が討論の流れの確認や順位の決め方などに言及する討論話段である。この「討論形式」の大話段は、前掲の「条件提示」や「条件すり合わせ」などの目的達成に関わる大話段とは性質の異なるものであると考えられる。そのため、特に注目する必要があると判断した。このような話段は、日本語で1グループの大話段数の平均23話段中3話段(13%)、中国語では15話段中2話段(13%)と同程度見られたが、出現箇所に差異が見られた。

日本語では、「討論形式」は会話資料の開始部・結論部だけでなく、討論の最中の「条件提示」や「順位決定」の前後で併せて確認される場合があった。この現象は脱線話段の前後にはほとんど見られなかった。このような討論過程の特徴は日本語全6グループのうち5グループで観察された。

一方中国語では、会話資料の開始部・結論部で、ともに「討論形式」について言及する話段が観察されたが、日本語のような討論話段の前後における出現は、C2で1話段確認されただけで他のグループには見られな

かった。討論は主に相手の意見への評価や自分の主張、または相手を説得するような話段で構成されていた。したがって、中国語グループは、まず討論の手順を確認してから本題に入り、各自の主張や意見交換を行い、最後に結論の確認をするという討論過程の特徴があると考えられる。

## 5.2 脱線話段の特徴

次に、脱線話段について述べるが、この話段については、連続タイプに特徴が見られた。日本語では、脱線話段連続タイプが全体で 25 例あり、全 6 グループで見られた。それに対し中国語では、2 例見られ、全 6 グループ中 2 グループで観察された<sup>13)</sup>。これら脱線話段全 27 例中には、大話段中でさらに複数の小話段が展開する例が 8 例あったが、それらは全て日本語グループで行われたものであった。また、小話段が展開しない例でも、平均発話数で日中に差異が見られた(日本語 13.9 例、中国語 7 例)。表 4、表 5 はその例である。

表 4・表 5：脱線話段連続タイプの例

表 4：(日本語・J5)

大話段	小話段
2：条件提示・給料(討非)	
3：給料と年収 (脱連)	3-1：公務員給料(13)
	3-2：弁護士初任給(9)
	3-3：コンサル 平均年収(7)
4：条件提示 (討非)	4-1：給料
	4-2：やりがい

注 1 小話段( )の数字は発話数である。

表 5：(中国語・C4)

大話段	小話段
5：条件すり合わせ (討非)	5-1：文系と理系
	5-2：共同の趣味
	5-3：自分の主張
	5-4：優しさ
6：周囲の女性(脱連)(9)	
7：条件提示 (討非)	7-1：優しさ
	7-2：親孝行
	7-3：教養
	7-4：男女の差

日本語では、脱線話段連続タイプが一定量の発話を保持していたり、表 4 の 3-1 から 3-3 のように、脱線話段連続タイプ内で、ある話題から次の話題が展開したりするという現象が見られた。一方中国語では、表 5 の 5-4「優しさ」についての具体例が発展し、6 での会話参加者達の周囲の女性の話題となって話が脱線した場合でも、それ以上に展開することなく、討論話段に戻される傾向があった。以上のようなことから、日本語では、脱線話段を許容することにより、会話参加者間で協調的な雰囲気を保とうとする意識が強いことが窺える。それに対し中国語では、

たとえ親しい友人間であっても討論の目的を優先していると考えられる。

### 5.3 話段の「割り込み」現象

日本語と中国語の討論を分析した結果、日本語に以下のような「割り込み」現象が頻繁に見られた。「割り込み」現象とは、「条件提示」や「順位決定」などの討論話段に、先述した「討論形式」の討論話段や脱線話段が割り込むものである。日本語の討論では、この「割り込み」現象によって一度討論が中断され、しばらく脱線話段や「討論形式」が保持されるが、「条件提示」や「順位決定」などは本討論において必要であるため、すぐに再開する。中国語の大話段数の平均が 15 話段であるのに対し、日本語は 23 話段と、中国語よりも多くの話段で構成されている点は、この「割り込み」現象に関連があると考えられる。この現象は、日本語では全グループで見られたが、中国語ではどのグループにも見られなかった。以下は日本語での「割り込み」現象の例である(表6)。また、前出の表4も同例である。

表6：日本語資料で見られた割り込み現象の例(J1)

大話段	小話段
3：条件提示(討非)	3-1：トップダウン
	3-2：1位
	3-3：人間関係
4：討論形式・条件確認(討非)	
5：条件提示(討非)	5-1：Aの1位・やりがい
	5-2：将来性
	5-3：やりがい
	5-4：Cの1位・公共性
6：討論形式・仕事の定義確認(討非)	
7：条件提示(討非)	7-1：金・自由時間
	7-2：将来性
	7-3：現時点での就職

3・5・7は「条件提示」という内容的にまとまりがある大話段であるため、3に4の「討論形式」が割り込んでも、すぐに5で再開している。また、同様に5に6の「討論形式」が割り込んだことで一時中断するが、7で再開している。結果として、日本語の話段数が増えていると考えられる。

以上、討論話段、脱線話段、「割り込み」現象の3つの側面から資料

を分析した。

## 6. 日本語・中国語の結論に至るまでの過程について

本研究では日本語と中国語の談話資料を対象に、討論における結論に至る過程について分析を行い、日中両言語における討論過程の特徴の一端を明らかにした。

分析の結果、討論は両言語ともに討論話段が全体の半数以上を占めていた。そして、討論話段については日中とも「条件提示」⇒「条件すり合わせ」⇒「順位決定」という基本的な過程が見られた。しかしこれは、「仕事、もしくは、恋人に求める条件ベスト5を決める」という限られた条件下での結果であるため、討論全般への援用は難しいだろう。また、討論話段の中でも「討論形式」については、出現箇所の日中両言語で差異が見られた。「討論形式」が会話資料の開始部・終結部に現れることは両言語に共通しているが、日本語ではそのほかにも討論の最中、つまり、他の討論話段の前後にも出現し、「条件提示」や「順位決定」等と併せて確認されるという現象が観察された。しかし、中国語ではこのような現象はほとんど観察されなかった。次に、脱線話段の構造については、日本語の特徴として、「脱線話段連続タイプ」の話段中で小話段が展開していたことが挙げられる。これは会話参加者が協調的な雰囲気を保つために、討論から外れた話題でもそれを即中断することを避けたためであると考えられる。一方の中国語では、同じ「脱線話段連続タイプ」でも全体的に脱線話段が長く続かない傾向が観察され、会話参加者間の協調的な雰囲気よりも、討論の目的を優先させていることが推測される。

また、日本語に「割り込み」現象が見られるのも特徴の一つとして挙げられるだろう。この現象は「討論形式」や脱線話段が討論話段の展開中に割り込むもので、その結果として日中両言語で、大話段数が大きく異なることとなった。そして、日本語の討論では会話参加者間の協調的な雰囲気を保つために、討論話段進行中に脱線話段の「割り込み」現象が容認され、その脱線話段が時には小話段を形成し、さらに展開するという現象が現れたのではないかと考えられる。これらのことから、日本語では討論の目的を意識しつつも脱線話段の継続を許容するのに対し、中国語では討論の目的が優先され、話題が討論の内容から脱線しても、すぐに本題に戻されるという特徴があると言える。

## 7. 今後の課題

以上で述べたように、本研究で明らかにした特徴は、今後の接触場面における討論への参加方法や、討論の進め方などの諸問題を考えるうえでの一つの指標になると考えられる。しかし、本調査はあくまでもケーススタディの一環であり、今回対象とした会話資料数は、結果の一般化に十分な数であったとは言いがたいため、引き続き観察を行う必要がある。また、本稿では、討論の結論に至るまでの過程を話段という単位を用いて考察したが、具体的な言語表現の分析までは至らなかった。だが、日中両言語の討論の特徴をより明確に示すには、言語表現を含めた詳細な分析が必要である。今後、これらの課題に取り組んでいきたい。

### 注

- 1)佐久間(1987)によると、「提題表現」とは、文の「主題」「話題」「主語」等と言われるもので、提題表現「ハ」に代表される言語形式を備えるものであり、文段区分の一指標としたものである。
- 2)佐久間(2003)において、「話題」とは、「文の話題」や「談話の話題」や「段や連段の話題」等、種々様々な意味のまとまりがあり、「話題」という概念の規定自体も、より明確なものにしていく必要があると述べられている。
- 3)なお、時間内に5位までを全て決めることは、必須事項にはしなかった。
- 4)中国語の文字化、及び日本語翻訳に関しては、中国語母語話者に依頼した。
- 5)筑波大学(2001)『東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書平成13年度V(Part.1)』「日本語会話データベース作成プロジェクト活動報告付録」pp.43-52を参照。
- 6)注5)の資料に改訂を加えた詳しい書記法である。①\*：聞き取れない箇所。語数に関わらず\*を1つ記述する。②{ }：非言語、括弧内で説明。例えば、{笑い}、{うなずき}等。③,：短いポーズ・会話の切れ目。④(×秒)：長い沈黙。例えば(3秒)、(5秒)等。⑤@：発話者不明。二人のどちらの発話か分からないときは@(A/B)と記述。⑥//：発話の重なり。
- 7)河内(2003)においては「大話段」「話段」「小話段」と3段階の単位を設けているが、本稿は部分的な構造ではなく、結論に至るまでの討論全体の過程を明らかにすることが目的である。全体からの話題の移行の流れを見るには、2段階の単位だけで十分であると判断した。
- 8)河内(2003)は鈴木(1995)の「内容区分調査」方法を参考にし、「話段区分調査」を行った。
- 9)話段区分調査者は日本の大学院に在籍する20代から30代の日本語母

話者 3 名(執筆者含む)と、中国語母語話者 3 名(日本語能力試験 1 級取得者)である。本調査では話段区分調査者の性差は考えないこととした。

- 10)表や例での用語は以下の通りとする。①討連：「討論話段連続タイプ」、②討非：「討論話段非連続タイプ」、③脱連：「脱線話段連続タイプ」、④脱非：「脱線話段非連続タイプ」
- 11)話段区分調査者間の話段区分の一致率については、調査者によって区分した話段の大小に差がある場合もあり、どこまでを一致と判定するかは判断し兼ねた。また、調査者数が各 3 名であることもあり、この条件下で一致率を算出しても信頼性に欠けると考え、今回は数値として示すことはしなかった。
- 12)表 2 において、J6 では討論話段と脱線話段の割合が逆転しているが、これは J6 が 5 つの条件全てを決定した後で脱線話段に移行し、それが資料採集終了時まで 7 話段続いたことが関連していると考えられる。なお、J6 は正規分布内のデータであり、妥当性があると判断したため、分析対象からは除外しなかった。
- 13)脱線話段連続タイプは、C6 グループでも 1 例見られたが、既に順位が決定した後に行われたものであり、討論中のものではないため、今回の分析からは除外した。

## 8. 参考文献

- 河内彩香(2003)「日本語の雑談の談話における話題展開機能と型」『2003 年度早稲田大学日本語教育研究』第 3 号、早稲田大学、pp.41-45.
- 木暮律子(2002)「日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について」『第二言語としての日本語の習得研究』5 号、凡人社、pp.5-22.
- 佐久間まゆみ(1987)「文段認定の一基準(I)－提題表現の統括－」『文藝言語研究言語編』11、筑波大学文藝・言語学系、pp.89-135.
- 佐久間まゆみ(1990)「文段認定の一基準(II)－接続表現の統括－」『文藝言語研究言語編』17、筑波大学文藝・言語学系、pp.35-66.
- 佐久間まゆみ(1997)「第 2 章 文章・談話のしくみ」佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編『文章・談話のしくみ』おうふう、pp.176-180.
- 佐久間まゆみ(2002)「3 接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則著『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店、pp.119-189.
- 佐久間まゆみ(2003)「第 5 章 文章・談話における「段」の統括機能」『朝倉日本語講座 7 文章・談話』朝倉書店、pp.91-119.
- 鈴木香子(1995)「内容区分調査における「話段」設定の試み」『国文目白』34、日本女子大学国語国文学会、pp.76-84.

砂川有里子, アンドレイ・ベケシュ, 杉本武, 小野正樹, 阿部二郎, 塚原真紀, 富樫純一(2001)「日本語会話データベース作成プロジェクト活動報告付録」『東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書平成13年度Ⅴ(Part.1)』筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究組織, pp.43-52.

陳明涓(2002)「フレームに見られる文化的差異—台日大学生によるグループ討論の場合—」『人間文化研究年報』26号, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科, pp.39-46.

山本綾(2003)「話題転換についての—考察—アメリカと日本のテレビのトーク番組を資料として—」『えちゅーど』NO.33, お茶の水女子大学大学院英文学会, pp.57-81.

(御園生：文化外国語専門学校)

(程田：赤門会日本語学校)

(アネークポンパン：筑波大学大学院地域研究研究科修士課程修了生)

(柳田：筑波大学大学院地域研究研究科修士課程)